
アマガミ ~ 聖夜の物語 ~

リム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマガミ〜聖夜の物語〜

【Nコード】

N1854U

【作者名】

リム

【あらすじ】

まあまあチート気味なオリキャラが、アマガミのヒロイン達と仲良くなっていく物語です。

プロローグ

それは昔、私をいつも連れまわしていた男の子との思い出。

そのやんちゃな男の子は、私が形だけの抵抗をしてもお構いなしに強引に手をひいていく。

私はその男の子が見せる笑顔が大好きで、私もその子と一緒に笑っているながら遊んでいた。

でも…その子は急にいなくなってしまった……

「……………夢か……」

時計を見るともう7時。懐かしい夢を見たなあと思いつつ起きあがる。

結局なんでもの子がいなくなったのかは分からないけど、もう10年以上も前の話。

当時のことはよく覚えているのだが、男の子の顔だけは思い出せない。

そこまで考えて時間がないことを思いだし、私は頭を切り替えて今日の朝ご飯はなんだろうと部屋のドアを開けた。

これから始まる新しい生活に、ほんの少しだけ胸の高鳴りを感じて
...

プロローグ（後書き）

今回は短いですが、これからは長くするよう善処します。

第一話 交錯し重なり合う運命

僕、白石？八重^{やえの}乃は今、学校への道を歩いている。

それだけならいつもと変わらない日常。

でも今日は違う。

周りを見ると新品の綺麗な制服に身を包み、今から始まる新たな学校生活に期待と不安が混じったような、そんな緊張した顔をしている子がたくさんいる。

そう、今日は輝日東高校の入学式の日なのだ。

「いよつ、どうした〜大将、そんなに新入生を見つめて。可愛い子でもいたか？」

「梅原か、おはようくらい言ったらどうなんだよ……」

この男の名前は梅原正吉。剣道部（幽霊部員気味だが）に所属していて、運動全般をそつなくこなす。

よくお宝本の話をしてくるが、根はいい奴である。

「なに、挨拶なんかより可愛い女の子の方が優先ってことだ！」

「威張って言うことじゃないと思うな、それ」

この梅原という男と、今はいないが橘純一という男はこつこついう事を平然と言つてのける。

新入生に可愛い子がいても、どうせ接点なんて…

「よう、梅原に八重乃。朝から何の話してるんだ？」

「ん？」

噂をすればなんとやらだ。橘純一とその妹の……そうそう、美也ちゃんだ。

「やあ、純一。それと美也ちゃん。」

「おはよう、八重ちゃん」

美也ちゃんとは久しぶりだけど、小さい時はちよくちよく純一の家遊びに行つたから覚えている。しかもそのたび、まだ小さかった（今も小さいが）美也ちゃんが僕達の遊びに入ってきたのだから、お互い覚える理由にはなる。

それより、今美也ちゃんが来てる服は…

「美也ちゃん、もしかして輝日東に入学するの？」

「そうだよ！ 八重ちゃんも輝日東なんだ。これからまたよろしくね！」

「ああ、よろしく」

なるほど、美也ちゃんがいるなら新入生とも接点が……って梅原は関係ないな。

「俺によろしくはないのかよ……」

しかも美也ちゃんが何も言わない事に拗ねてるし。

かわいそうに梅原、合掌。

「美也、新入生はそろそろ行かないといけないんじゃないか？」

「本当だ！ じゃあみゃーもう行くね、バイバイ八重ちゃんと梅ちゃん！」

「あ……もう行っちゃったよ……」

梅原に手を合わせていたら美也ちゃんが走って行った。

その梅原は美也ちゃんに名前を呼ばれた事で復活している。

ホントにタフな奴だな…。

発表されていたクラス分けを見て、教室に行き、去年も同じクラスだった奴と少し話をして、席につく。

ちなみに僕のクラスは2 - Aで、純一も梅原も同じクラスだった。

「さて、なぜ入学式に我々2年が参加しているのかを説明しよう」

「急に何言ってるんのあんた…」

純一が何かしゃべっていたら、中学から一緒に棚町薫がツッコんでいた。

棚町も同じクラスだったのかと思いつつ話を聞く。

「でもな、薫。説明しないと読んでる人が分からないだろう？」

「読んでる人に説明？ 意味が分からないんだけど…」

「僕も分かんないよ」

薫が目で聞いてきたので返しておく。

読んでる人ってなんだろう？

「まあ純一はたまにわけの分からないことを言っしね〜」

「そうだね〜」

「何だよ、八重乃も薫も。僕はただ……」

少し息を合わせていじめるとすぐに拗ねてしまう。

面倒臭い奴だなあと、薫と目で会話していると教室のドアが開いて、高橋先生が入ってきた。

「はい、みんな席着いて。……よし、みんないるわね。私が一年間このクラスを担当します、高橋麻耶です。みんなよろしく」

先生の自己紹介が終わるとにわかには男子達がざわつき始める。おそらく美人の先生が担任だからとかいう理由でテンションが上がっているのだろう。

高橋先生は去年も僕のいたクラスの担任で仲がいいので、僕も少し喜んでいるが。

この後クラス内での自己紹介が始まり、僕が自己紹介をすると女子

がざわめいて驚いたが、手早く終わらせた。

「さて、今からみんなには対面式に出てもらいます」

この学校には入学式と併用して対面式というものが行われる。これは新入生と在校生が文字通り対面する式で、この中で2年代表としてのスピーチを僕がしなければならぬ。

いくら去年生徒会にいたからってなんで僕なんだろう…。

「じゃあ、みんな並んで。体育館に行くわよ」

高橋先生が言い終えると僕の方に来て、

「八重乃くん、よろしく頼むわね」

と言ってきた。

僕はそれに苦笑で返し、体育館へと向かう。

体育館に着くとすでに新入生がいて、美也ちゃんと目が合ったので手を振っておく。美也ちゃんは満足げな笑顔で手を振り返してきた。なんだかまた新入生の女子がざわついた気がするが……

と思っていたら、こちらをじっと見つめる女の子がいた。なんとなく美也ちゃんと同じように手を振ってみると、驚いたようだけどお

辞儀をしてくれた。礼儀正しい子だな。

対面式が始まって1、2、3年の代表が出てきて スピーチをし合う。前に出ると、僕以外の代表は両方とも女の子だった。

1年の代表は知らない子だったが、3年の代表は森島先輩だった。

まあ人気があるのはわかっていたから予想はしていたけど。

そうしてスピーチが終わり解散と言われて教室に帰ろうとすると、森島先輩が声をかけてきた。

「やつほー、八重くん。いいスピーチだったね」

「こんにちは森島先輩。先輩こそいいスピーチでしたよ」

「もー、またそんな呼び方する！」

「いや、でもはるちゃんはちょっと……」

実は目の前にいる学校1の美人と言われている森島先輩とは、1年の頃によく話しかけられた事があるので知り合いである。

話しかけられて話していると何故だか知らないがなんの前触れもなく、

「私の事は森島先輩って呼ばないで！」と言い出したのだ。

「それはひびきが勝手に言っただけだからほかのでもいいの!」

そう、そしてその場にいたひびき先輩が一言、

「じゃあはるちゃんって呼んでみたら?」と。

僕は正直はるちゃんとは呼びたくないし、どうしようか。と迷って結局森島先輩と呼んでいる。

「じゃあ森島先輩がこう呼んでっていう例をだして下さい」

「私としては、呼び捨てでもいいから名前と呼んで欲しいんだけど?」

「聞いて間違いでした」

そう言っただけで帰ろうと…《がしっ!!》

「待ちなさい、話は終わってないわよ!」

……このあと先輩から逃げるのに10分かかってしまったのは別の話。

森島先輩から逃げ出して教室へ帰ると僕が最後で、慌てて席に着くとクラス会議が始まった。これは各委員や係などを決めるもので、生徒会で高橋先生によくこき使われている僕が進行をする事になっ

てしまった。理不尽だ。

「はい、それではクラス委員をやりたい人、いたら手を挙げて下さい」

誰も手を挙げないと思っていたら、すっと手が挙がった。

「誰もやらないのでしたら立候補します」

絢辻さんだった。クラス委員なんて面倒な事をやるのがいかにも優等生な彼女らしい。

「はい、では絢辻さんがクラス委員をやるのでいいですね。決定」

最後少し面倒くさい感じで話すと、小さな笑い声が聞こえた。高橋先生からは睨まれた気がするが別にいいや。

それから絢辻さんが進行をしたのだが、本当にあつという間だった。各委員や係が一瞬で決まったのだから、皆彼女の手際のよさを実感したことだろう。

学校が終わって家に帰ろうとすると校門の所に桜井がいて、僕に気がついて話しかけてきた。

「八重乃、久しぶり。ね、一緒に帰ろうよ」

「急にどうした。まあいいけど」

「ホントに！ やったー！」

桜井と二人で帰った。喜んでいる桜井の顔を見ているとたまには一緒に帰ってやるのもいいかな、と思った。

第一話 交錯し重なり合う運命（後書き）

次話の投稿です。10回程度読み直していますが間違いがあればすみません。

自分ではなかなか書いたつもりが全然ページが増えないですね。また次頑張ります。

第二話 乙女の心は移りゆく花のように

「あゝ……、もう限界……」

最近の疲れからか学校に来て授業に集中できない。

「何なんだよ、あいつらいたい……」

「……俺はそんな悩みを持つ大将が羨ましいよ……」

梅原に何か言われたが返す気力もない……。というのも授業が終わると廊下にいつも女の子が何人が集まってきて、僕の方を見てはこそそと何か話していくのだ。

そのせいで休み時間になっても全然気が休まらない。最近はずっと誰かに見られている気がしてなかなか寝付けないくらいだ。

これを梅原と純一に相談すると、

「贅沢な悩みだなっ！」

と声を揃えて言われた。

そんな事があつてとても寝不足なのだが相変わらず女の子が廊下に来ている。あゝ眠たい……

「あれ、美也じゃないか」

「……………ん？」

純一の声が聞こえた。……美也ちゃん？

「何々……？ わかったちよつと待つてろ。
おい八重乃〜！」

「ふうい〜」

純一に呼ばれた気がして廊下に向かう。すると美也ちゃんと……あ、この子は確か……

「君って入学式の時の？」

「あ、はい。そうです」

「はじめまして……とはちよつと違うか。まあ僕の名前は白石八重乃って言うんだ。よろしくね」

「あ……はい。私は七咲逢といいます」

「逢ちゃん……だね。覚えてよ。」

……それで美也ちゃん、僕に何か用事？」

「え〜っと……、逢ちゃんに八重ちゃんを紹介してって言われたんだけど……」

「ちょ、ちよつと美也ちゃん！それは言わないでって言ったのに！」

「……………だつてみゃーがいなくても逢ちゃん八重ちゃんと仲良くなれたじゃない」

「そつ、それは…」

……………何？ つまるところ七咲逢ちゃんが僕に会いに来たと？ 入学式で目が合ったただけなのに？

「えゝつと……………逢ちゃん？」

「は、はい！ 何でしょうか！」

僕が声をかけたら美也ちゃんとの口論をやめてこっちに来る。……………
なんだか小猫みたいで可愛いな……。じゃなくて。

「結局逢ちゃんはなんで僕に会いに来たの？」

「えっ！ ……えつと、それは…、ですね……………」

逢ちゃんが口ごもる。急かさずに答えを待っていると、

「あの…あの……。す、すみませんっ！ 失礼します！」

「へっ？」

「えっ、逢ちゃん！？ ちょっと待ってよ！ じゃあね！ にいに、八重ちゃん！」

……行ってしまった。美也ちゃんも驚いたのか純一の事をにいと呼んでいたな。僕は知っていたからいいけどクラスメイトがなんだか戸惑ってるようだ。

そして昼、なんとなく朝の事が気になったのもあり、逢ちゃんと昼ご飯を食べようと思って1年の教室に行く。でも逢ちゃんが何組かは知らないや……。

「あ、あのっ！」

「はい、何ですか？」

誰かに話しかけられて咄嗟に敬語で答えてしまった。まあ別にいいが。

「な、なにか…お困りですか？」

おどおどしながら話すその子は、よく見てみると可愛い女の子だった。茶髪のくせつ毛に丸い瞳、身長割に出るところ出てるし。って何考えてる僕、今は話しかけられてるんだぞ。

「ああ、ありがとう。えっと、じゃあ七咲さんのクラスを教えてくださいかな？」

言ってから目の前の女の子が逢ちゃんの事を知ってる可能性は低いことに気付いたが、その女の子は、

「あ、はい。わかりました……」

と言って、逢ちゃんのクラスを教えてくださいました。おどおどしながらも親切にしてくれた女の子に礼をし、件の場所へ向かう。

「え〜っと……」

しまった。来てからの事を忘れていた。下級生のクラスは入りにくいしどうしようかな……。いや、やっぱり直球で行くか。

「あの〜、すみません、七咲逢ちゃんいますか？」

僕がクラスの入り口で声をかけると、今まで昼の喧騒に包まれていた教室がし〜んという言葉が似合うくらいの静寂。

数秒後に、「え〜っ！……！！！」という声が……ってうるさいな。な

んだか皆僕に驚いているようだ。もうこっちを向いて噂を始めてるよ……

「先輩！ 何のご用ですか？」

「ああ、逢ちゃん」

その中で目的の人物がやって来た。僕がお昼ご飯と一緒に食べようと伝えると逢ちゃんは快諾してくれ、屋上で食べる事になった。

屋上。気持ちのいいくらいの晴れ。丁度日が僕らの真上辺りを動いている。うららかな陽気は眠気を誘ってくる、が今は食欲の方が勝っている。

「じゃあ、食べようか」

「はい！」

お弁当を開くと今朝自分で作った物ながら空腹のためか美味しそうに感じる。……気になってふと逢ちゃんの方を見ると彩り鮮やかなお弁当が。

「逢ちゃんのすごいね！……もしかして手作り？」

「あ、はいそうです……一応……。ありがとうございます。でも先輩

のお弁当も美味しそうですね」

「ありがとう。よかったら食べてみる？」

「え、いいんですか？……でも悪いですし……」

まあ逢ちゃんの性格的にここで素直に受けとらないよなあ。でもせつかくだし……

「だったらお弁当交換、しようよ」

「お弁当交換……ですか。わかりました、それをお願いします」

逢ちゃんは僕の気持ちを汲んでくれたんだろう。ホントにいい子だな。

「それじゃあ……ふあ、ほのエビホロッケ美味しいね」

「ふふつ、ちゃんと口の中の物食べてからしゃべって下さい」

「ふあゝい」

逢ちゃんの手作りと思われるエビが入ったホロッケを食べ、逢ちゃんに僕が作ったホロッケを食べさせ。なんだか恋人のような時間を過ごした。

「……………先輩」

「ん？」

食後、とくにすることもなく屋上に大の字になって寝転んで逢ちゃんと話していると、逢ちゃんが真剣な表情で話しかけてきた。

「どうして今日は会ったばかりの私を誘ってくれたんですか？」

「……………」

…そう来たか。正直理由という理由はない（この時、朝の事を僕は忘れていた）のだが、目の前の女の子はそんな答えは期待していませんとばかりにキラキラと目を輝かせて僕を見ている。

しかしそれももつともだ。始めは少し目が合っただけで、今日初めて言葉を交わしたくらいの関係なのだ。

何か僕が逢ちゃんに特別な感情を持っていると思われても仕方ないだろう。

こうなったら……

- 1、真実を伝える（実はなんとなくなんだ）
- 2、望まれた嘘を答える（君の事が好きだから）

3、あえて美也ちゃんを使う（実は美也ちゃんの事で相談が……）

さあどれだっ！って2は絶対ない！

…………結論、1で。

「なんとなく、かな？ 実は僕も分かってないんだ」

「…そ、…そうですか…」

やっぱり何か期待してたみたいだ。わかりやすくテンションが下がっている、具体的にはHiからLowくらいまで。このままじゃ駄目だ、ここで言うべきことは……！

「逢ちゃんって可愛いよね」

「へっ？」

逢ちゃん硬直。しかしどんどん顔が赤くなっていき、って僕はいたい何て言っただんだ！

「ええと、これはそういう意味じゃなくて、あつ、でも逢ちゃんが可愛いのは本当に思ったことで……」

「……………」

あれ？ 僕今すごい墓穴掘ってる？ だって逢ちゃんの顔がこれでもかというくらいに赤くなっている。……ぎゃ、逆に大丈夫なんだろうか。

「ええと逢ちゃん、大丈夫？」

「ふえっ！ ……………し、失礼しますっ！」

「あ、逢ちゃん！？」

逢ちゃんは走って行った。……逢ちゃんのお弁当を忘れたままで。

「…………どうしよっかな。これ」

逢ちゃんが走っていないなくなったのは僕の発言が原因だろう。だってら会いに行くのは少し気まずいんだけど……

「まあ、放課後に届けに行けばいいか」

そうして僕は屋上を後にした。

（――）七咲

やってしまった。

また先輩から逃げ出してしまった。2回目だ。

というのも、先輩は1年女子の間でも噂になるくらいの美形で、スポーツ万能で成績も優秀で。しかも性格がとても良くて。

そんな先輩が会ったばかりの私にお昼に誘ってくれて。

（しかも、か、可愛い……なんて言ってくれた）

先輩と知り合いだけでも友達に羨ましがられるのに、私は今日クラス全員が見ているなかで名前を呼ばれた。

「……教室に帰ったらみんなに質問攻めにされるんだろうな」

私は今からその時の言い訳を考え、あまり良いとはいえない気分でも頭の中では先輩に言ってもらった「可愛い」を思い出して喜びながら、教室に戻った。

（――）八重乃

逢ちゃんが帰ってしまってから。僕は心地良い空気と満腹感のために眠たさが尋常ではなかった。しかしもう昼休みは終わる。こうなったら次の授業もこのまま寝てやると心の中で決意し、机にうずくまって目を閉じた。

……鞆の中に逢ちゃんのお弁当箱をちゃんと入れて。

第二話 乙女の心は移りゆく花のように（後書き）

次話の投稿です。

いやゝ、大変でした。この物語って実は4番目に書いたものなんです。

1、2、3と諸事情で消したり消えてしまったりで、時間がかかりました。

そのせいかほとんど見直してません。

間違えてたらすみません。

今回も頑張ったつもりが4ページ……いやまあ、いいんですけどね。

また次頑張ります。

第三話 陽気なステップを踏み出して

周りに何も無い広大な草原。

そこに僕はいる。

どうして僕がここにいるのか、どうやって僕はここに来たのか分からない。

でも、そんな事気にならなくなるくらい気持ちがいい。

若々しい緑が生い茂るそこは、時折吹く風が木々を揺らし僕の頬を撫でる。

「そうか……ここは僕の心の中だ」

そうして気付く、ここはかつて僕が創造した世界だと。

……誰もいない僕だけの世界。静かで平和で、住んでいるのは植物と小動物。まるでメルヘンのようかもしれないが、この空間は僕を癒してくれる。

だが同時に分かったことも一つある。これが夢だということだ。

この世界は僕の中にしか存在しないのだから。

「せんぱいつ」

不意に誰かの声が聞こえる。

……いや、そんなはずはない。この世界に僕以外の人間はいない。
だったら誰だ……？

振り返るとそこにいたのは……。

「……ん……い……。せ……ぱい……。……せんぱい！」

「………はい……？」

夢から覚めて聞こえたのは夢でも聞いたあの声。心地良い響きと、
体を揺さぶるゆりかごのような揺れが再び僕を睡眠へ誘う。

「先輩、起きてください！」

しかしどうやら声の主は僕に安眠を与える気はないらしい。

「……ふっ！ ……あれ？ 逢ちゃん？」

気合いを入れて起きると逢ちゃんがいた。

「ということは……」

夢で聞こえたあの声は逢……ちゃんってことか？

「……せんぱい、どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ。大丈夫。それより逢ちゃん何か用？」

今はこの事を考えないでおこう。そう思って逢ちゃんに話を振る。実際もう日は傾きつつあり、夕暮れという表現の合う時間帯だ。どうやらクラスメイトは寝ている僕をほったらかして帰ったようで、そんな中逢ちゃんが何をしているのかを知りたいのもあった。

「いえ……特に用事はないのですが……。……その……よかつたら……」

「よかつたら？」

この流れは逢ちゃんが僕に何か頼み事があるのだろう。というか……

「……そのためにわざわざ待ってくれてたの？」

「え、いや、はい。……そうですね、だいたい1時間くらいでしょう
か」

「あ……やっちゃった。ごめんね？」

「いえっ！ そんな事ありません！ むしろ……好都合……です」

「……好都合？」

放課後、誰もいない、二人きりの教室……。まさか！

……って逢ちゃんがそんな事考えるわけないか。……じゃあなんだ？

「えっと、それはですね……。その、先輩！」

「何？」

「いつ、一緒に帰ってもらえませんか!？」

……ああなるほど。

それなら分かる。確かに二人きりなら周りから冷やかされることもないし誘うにはいいタイミングだろう。

「ははは。いいよ、一緒に帰ろっか」

「ちよつと先輩、笑わないで……え？先輩今なんて……？」

「聞こえなかった？いいよ、一緒に帰ろっつて言っただよ」

「ホントですか！」

さっきまで不安そうな顔をしていたのに、OKした途端に笑顔が浮かぶ。

うん、やっぱり女の子は笑顔が似合うな。

5分後。お互いに鞆をとりあつて校門に集合。

「待たせちゃった？」

「いや、私も今来た所です」

「そっか、じゃあ行こうか」

「はい！」

なんだかデートの待ち合わせみたいな会話だな。このセリフは相手を待たせた時にするやつだけど2分とたってないだろうし、いいや。

………というかデートの定義って男女が待ち合わせる事だったような……。

別段特別な事はなく、世間話（逢ちゃんが話し始めると僕が水泳の話だった）をしながら帰った。

楽しい時間とは早く過ぎるもので、逢ちゃんと別れないといけない所にも着いた。

「先輩、私はここで」

「そう、じゃあ、またね逢ちゃん」

「はい、今日は楽しかったです。ありがとうございました。」

では、失礼します」

逢ちゃんはきちんとお辞儀して帰って行く……………本当に礼儀正しい子だなあ。

「ふう……………ただいま」

逢ちゃんと別れてから一人で帰宅する。このマンションに越してから2年もたつのか……………。なんだか愛着わくなあ。

カードキーをかざして扉のロックをはずす。するとなぜか部屋に電気がついていて、玄関に靴がある。

……………どうせこんなことをするのはあいつしかないな。

「四葉《よつば》姉ちゃん！」

「おう、おかえり八重」

……………はあ……………

予想通りだ。リビングの綺麗に片付けていたテーブルの上にはビールの空き缶。しかも大量。酒臭い。

「姉ちゃん、またかよ……」

「ぶっ、いいじゃない」

全くこの人は……僕が一人暮らしを始めてからよく遊びに来るのはいいんだが、その度に僕のお金で酒を買って愚痴をこぼす。

それに付き合わされるこっちの身にもなってほしいものだ。

「こんなに美人でないすばでいなお姉ちゃんが訪ねてきてるのに、八重ちゃんひどい」

「はいはい……」

もう酒まわってるな、これ。

……はぁー……。……

その後。

四葉姉ちゃんの愚痴に長時間、具体的には朝日が昇るまで付き合わ

された。

でも僕は姉ちゃんの話に適当に相槌をうちながら逢ちゃんの事を考えていた。

なぜ彼女は僕だけのあの世界に居たのだろうか………という、その事を……。

第三話 陽気なステップを踏み出して（後書き）

第三話をお届けします。

更新の遅さたるや…… あげく2ページですってよ！奥さん！

言い訳をするなれば忙しいです。とても。

今やらないといけない事がおおまかに3つありまして。

まあ1つ1つが多いんですが。

……愚痴になってしまいました、すみません。

また次回頑張ります。

オリキャラ紹介（前書き）

こんなタイミングで申し訳ありませんが、オリキャラを紹介します。

オリキャラ紹介

しらいしやえの
白石八重乃

16歳、誕生日は森島先輩と同じ9月22日。

ものすごくイケメン。性格も良く人当たりもいい。勉強も絢辻さんほどではないができて、運動も全体的にこなす。絵にかいたような理想の男子なので女子にモテる。

また、何らかのバイトをしていてお金を結構持っている。

家族構成は、父、母、姉、弟で、姉を筆頭に家族全員に溺愛されている。

家が遠くの田舎に引っ越してしまい、輝日東に入るにあたって一人暮らしを始めた。

そのため料理、掃除などの家事が全般的に得意でその家庭的な面がまた女子にモテている。

橘家、棚町家、桜井家とは昔から親交があり、純一、美也、薫、梨穂子とは前から友達。詞とは八重乃が1年の時に生徒会をやっている、クラス委員の詞と交流があったため知り合い。

同じく生徒会として水泳部のひびきとも交流がある。

そして八重乃とひびきが話しているとはるかが乱入。八重乃を気に入ったはるか八重乃に話しかけまくった。

隠しヒロインとは何かがあるかも……

白石四葉しらいし ぽうは

20歳、八重乃の姉。

誕生日は7月13日。

八重乃のことが大好きで溺愛している。また、身長は八重乃より少し大きくて175程度あり、モデル体型であるため可愛いというより美しいが似合う。3話に初登場、話中の通り、八重乃の家に勝手に入り八重乃の金で酒を買って酒盛り。

そして八重乃に愚痴をこぼす。

第二人がかっこいいと可愛いのとツップに立つので彼氏を作るより弟達を愛でるのが良いらしい。

白石鏡花しらいし きょうか

12歳、八重乃の弟。

誕生日は1月8日。

女の子のような名前だがれっきとした男である。

が、しかし女の子のような容姿をしており、身長も低く、性格も引っ込み思案なため小動物的な愛くるしさがある。

そのため女子や一部の男子にモテている。

八重乃ほどではないが四葉に溺愛されていて、四葉を怖がっている。そのせいか八重乃の事が大好きで頼りにするようになった。

オリキャラ紹介（後書き）

更新全然できてないなかで、話じゃなくてすみません。

言い訳、忙しいです。

次回頑張ります。

第四話 天使は悪魔に恋をした 前編

翌日……朝日が昇っていたけど翌日と言っておく。

四葉姉ちゃんは無痴を散々言って、僕に抱きついたりもして満足したのか帰って行った。

……帰り際に「よっしゃ！家に帰ったら鏡花を愛でよう！」「と言っていたのに関しては、鏡花を不憫に思う。

「さて、姉ちゃんも帰ったことだし、今日は何をしようか……」

今日は日曜日。そしてバイトがない日。もっと言えば、掃除洗濯は昨日済ませたし、生徒会の仕事もないし、暇だ。

そう、つまり暇なのだ。

……いやだって仕方ないだろ、やる事久しぶりに何もないんだから。

「~~~~ん……」

思考、そして吟味。

そうして導き出された答えとは……

1・買い物なりなんなりアウトドアだ！

2・たまの休みだ。家でごろごろしよう。

3・いや、ここはアウトドアとインドアの間にあるあの秘密のドアを…

結論、1だな。

…… 3のドアは自分で言っという謎だし。

しばらくして、普通の私服に着替え外に出る。

照り付ける陽射しの温かみが春を感じさせる午後。

とはいってもご飯を食べてないので、久しぶりに外食でも行こう。

「外食なんて久しぶりだな……何を食べようか」

とりあえず商店街の辺りをつろついてはいるのだが、いまいち何を
食べようかが決まらない。

誰かがオススメでもしてくれたいんだけど、そんな都合よく……

「あ、八重く〜ん！」

つと……。あの女の子は森島先輩か？　なんか手をぶんぶん振りまわ
しながら近づいて来る。

……なんだろう、すごく他人のフリをしたくなってくる。

あの先輩は自分が周りの目を引く容姿をしていることの自覚がない
んだろうな……。

とりあえず挨拶はしておこう。

「こんにちは森島先輩」

「ヤッホー、八重くん。こんなところで何してるの？」

「暇なんでぶらぶらしてただけですよ」

「そう……なら私と付き合わない？」

「え……。あ〜。そうですね、今日一日お付き合いしますよ」

「ふふっ、よろしい」

森島先輩はえらくご機嫌のようだ。そんなに僕と付き合っのが楽しいのか……？ いや、そんなことはないだろう、うん。

「それで森島先輩、どこで何をするんですか？ 僕昼ご飯まだなんですが……」

「お昼は私もまだだよ。何か食べてから服を買おうとしてたの」

「そうですか、それじゃあ早く何か食べましょうか」

……どうやら今日一日は森島先輩の服選びに付き合うことになったようだ。まあ四葉姉ちゃんに何回か服選びに付き合わされたことがあるから分かるけど、女の子って選ぶ時間が長いんだよねー。

まあいいか、どうせ暇だし。

それより昼ご飯をどうしよう。早くとは言ったものの森島先輩の好みとか知らないぞ。

「んー、八重くんが何もなければ行ってみたい所があるんだけど……」

「いいですよ、そこに行きましょう」

…… 5分後。

「え、先輩？　ここって……」

「そ、牛井屋」

森島先輩について行って辿り着いたのは牛井屋。……なぜ？

「先輩、なんで牛井屋なんですか？」

なんだか森島先輩が牛井屋というのはすごく違和感がある。…いや、あの子供っぱさを見てたら分かってきた。

「いやあー、来たかったんだけど一人で入れなくて……」

「確かに女の子一人じゃきついかもですね」

「ありゃ？　八重くんが私の事を女の子って言った？」

「そうですけど……なんですか？」

別に森島先輩を女の子扱いするのは変じゃないと思うけど…

「以外だわ、私八重くんに女の子として見られてないんだと思って

「だから……」

「なんですか、それ。森島先輩は可愛いし充分女の子だと思いますよ」

「えっ……」

「あれ？」

「……今すごい事言わなかったか僕？ 女の子に面と向かって「可愛い」だなんて。」

「どこその変態紳士と同じか！？」

「ああ……ショックだ……」

「八重くん、どうしたの？」

「おつといけない。つい思ったことが口に出てしまった。」

「いや、なんでもありません。とにかくこの話は終わりです」

「えゝ！ そんな意地悪しないで、森島先輩が女の子らしくて可愛いって言うてごらん？」

「もう言いません！」

……つい甘やかしたらこうなる。結局昼食はなかなか始まらなかった。

(- -) 七咲

「はぁ、はぁ……」

今日のノルマは走れた。そして今から商店街で夕飯の買い物をして帰る。それが私の今日の予定だ。さっそく買い物……

「……？ 八重乃先輩？」

遠目で見ても分かる。あの人は八重乃先輩だ。

声でもかけようかな……

「八重乃せんぱ……」

「ねえねえ八重くん！」

「い……………!!」

あれは…森島先輩だ。でもなんで森島先輩が八重乃先輩と？

それに八重乃先輩も笑っていて楽しそうだし…。

「もしかして二人はそういう関係……………なのかな」

胸がしめつけられる。八重乃先輩は彼女はいないだろうって美也ちゃんに聞いていたのに…。

早く今日の買い物をして帰ろう……………。

私はあまりいい気分でないまま、歩きだした。

(・|・) 八重乃

相変わらず森島先輩は騒がしい人だな。

でもたまにはこういうのもいいかもしれない。

「く　あれ、逢……ちゃん？」

間違いない。あの小猫のような容姿と、運動大好きが表れるジャージを着た女の子は逢ちゃんだ。
森島先輩と二人で買い物の予定だけど声をかけるべきかな…？

「八重くん？　どうしたの？」

「いや……そうですね。可愛い小猫を見つけたんですが、連れてきてもいいですか？」

「可愛い小猫！？　うんうん連れてきて！」

「はい、只今」

……嘘はついてないぞ。うん。

「ね、逢ちゃん」

「！　八重乃先輩！？」

声をかけるとすごく驚かれた。そして一歩下がられた、警戒されている。

「逢ちゃん？ どうしてそんなに怖がるの？」

「へっ？ あ、いや、そういうわけでは……」

「全く……。で、こんなところで何してるの？」

「わ、私はランニングついでに買い物……」

「そうか、じゃあいいね」

「なにが……って先輩！　なんで背中を押すんですか！」

「そんなの今から一緒に行動するからに決まってるでしょ」

「いや、そんなこと言われても……」

急ぎの用事がなかったと思われるので逢ちゃんを連れ出す。最初は逢ちゃんも戸惑ってたみたいだけど、諦めてくれたようだ。

さて、今から逢ちゃんを森島先輩に紹介しないとな。

第四話 天使は悪魔に恋をした 前編（後書き）

第四話をお届けします。

前編という形ですみません。更新がなかなかできてなかったの
で長い文で一話よりかはいいかなと考えました。

後編を早く更新できるように頑張ります。

第五話 天使は悪魔に恋をした 後編

さて、逢ちゃんのことを森島先輩に紹介しなくてはならないな……

どうしたものだろう。二人で買い物の予定だったわけだし、小猫とか言って逢ちゃん連れていったら怒られるかな……？

僕が怒られたりするのはいいけど、森島先輩と逢ちゃんの仲が悪くのは避けたいし……

「せんばい？」

「なに、逢ちゃん？」

「無理矢理連れてきていて無視するなんて、ずいぶんひどい事するんですね」

「あ、いや…そんなつもりは……」

ええいもうどうとでもなれ！

「逢ちゃん、ついて来て！」

「えっ、ちょっと先輩またですか！？」

考えるのがめんどくさくなった僕は逢ちゃんを森島先輩の所につれていった。

「あつ、八重くん！ 小猫ちゃんは……ってその女の子だね？」

「も、森島先輩！？」

「さっき言ってた小猫ですよ。ほら、挨拶してごらん？」

「っ……コホン。森島先輩、私は七咲逢と言います」

さすがに逢ちゃんは抵抗があつたのか最初は嫌がつていたようだが、状況が状況だけに逃げられないと判断したようだ。

「ふむ、逢ちゃんね……ん？ なんで私の名前を知ってるの？」

「先輩、逢ちゃんは輝日東の１年生なんです」

そして補足。

「ふっん……なるほどね……」

森島先輩は逢ちゃんを遠慮なくジロジロと頭からつま先まで見始め

る。

逢ちゃんは少し怯えているようだが、何に反応したのかは知らないが、負けず嫌いの性格が逃げを許さないようだ。

「ねえ八重くん？」

「はい？」

「どの辺りが小猫なのかな？」

「……………雰囲気ですかね」

自分で言っておいて苦しいと思う。確かに逢ちゃんの雰囲気は、懷かずに気まぐれといった猫に似ている気がする。でもそれは面識のある人だからこそ分かるもので、初対面の森島先輩には分からなくて当然かもしれない。

困っていると、逢ちゃんからありえない声が聞こえてきた。

「に、にゃー……………」

「！？」

逢ちゃんが猫の鳴き声をしたのだ。これには白石家の八重乃さんも驚くというものだ。

森島先輩にいたっては何が起きたか分からない。

しかしそれも数秒たてばまたもやまさかの展開になった。

「か、可愛いー!!」

「……へ？」

森島先輩が可愛いと言った。はっきりと、逢ちゃんの方を向いて。

それから早かった。可愛いものに目がない森島先輩は、猫の声まねを恥ずかしそうに頬を赤らめながらした逢ちゃんをそれはもう可愛いと思ったのだ。

僕も後々冷静になってから思い出すと可愛かったと思う。

そして逢ちゃんをたいそう気に入った森島先輩は抱き着いて……これ以降は語らずともいいだろう。

ともかく、逢ちゃんの機転によって助かった僕。急激に仲良くなった二人。

そして僕は仲良くなった二人と共に、予定していた森島先輩の買い

物に行く……はずだったのだが。

油断していた。

逢ちゃんを入れたからといって森島先輩の買い物が変わるわけではないと、そう思っていた……のだが。

「ねえねえ、これなんか似合うんじゃない？ 八重くん脚細いし」

「それだったらいつそスカートでもどうですか？ フリルのついた可愛いやつ！」

この二人が話している内容が、僕を女装させる事でなければよかったのだ。

こうなった原因は少し前にさかのぼる。

森島先輩と逢ちゃんが仲良くなった後。

逢ちゃんは無理矢理連れて来てしまったようなものだったので、こ

れから森島先輩のための買い物に行く旨を伝えると森島先輩が、

「今日会ったばかりの私の服を逢ちゃんに選ばせるのはちょっと気が引けるな」

「いや、私は気にしませんが…」

森島先輩が滅多に見せない正論を言い始めた。

大人の逢ちゃんとは構わないと言っているが、この状態の森島先輩には何を言っても無駄だろうな。

「という訳で、お互いの共通の知り合いである八重くんの服を選びましょう！」

……これには僕も絶句した。

このような経緯でいま二人は僕の服を選んでいる。

さすがに女の子は服になるとテンションが上がるらしく、僕は店の外でその様子を眺めている。

というか、女物の服を扱う店のため僕は入って行きづらい。

最初は自分達の服を選んでいたようだが、いつの間にか僕に似合うかどうかと言うのを論議し始めた。

……………女物の服で。

いまだに二人は僕に着せる服についてキャピキャピと話し合ってる。

「二人とも、僕には女装なんて趣味は……………」

「そう？ 似合うと思うけど、ね、逢ちゃん？」

「はい！」

否定して欲しかったのだが返ってきたのは賛成。

逢ちゃんにいたっては即答である。

「こういうのは鏡花の方が似合うだろうな……………」

ボソツと本音を言う。二人には聞こえてなかったようだが、この場に鏡花が居たならば、僕にこんな役割はまわって来なかっただろうとは考えずにはいらなかった。

「うん！ 似合うよ！」

「……本当に先輩似合ってますよ」

そして来るべき時は来た。

僕に渡されたのはとてもじゃないが、男が着るような服ではなかった。

というか女の子でも着るのを躊躇うくらいに、可愛いやつだった……。

それを試着しろと言われ、さすがに否定したが、なぜか僕は渡された服を着て、こんな状況になっている。

そんな僕を見て、森島先輩は純粹に似合うと褒めて来た。うん、男としては全然嬉しくない。

逢ちゃんにいたっては笑いを我慢している。が、一応似合うとは言ってきた。

「はああー……………」

落ち込む。何がって男としての自尊心、プライドがどんどん傷ついていく。

逆に男として世界中の男性に聞くが、女物の服（形容しがたい程にフリルがついていたりピンクだったりの物）を着させられて似合うと言われて、果たして喜ぶ男性はどのくらいいるだろうか。

そう考えて鬱になりそうになった。

いや、考えないようにしよう。

「よし、じゃあ今から街に出てみちゃおう!」

「はあ!?!」

さらに意味が分からない。今僕は女装しているのに、なんで街を出歩かないといけないのか。

「ちょっと森島先輩、さすがにそれは……」

逢ちゃんもさすがにどうかと思ったのか森島先輩に反対をするのだが…

「うっん、こんなに可愛い女装をしてるのに誰にも見せないなんて

もったいないわ!」

この後。

嫌がる八重乃をよそに外出した三人は、たまたま居合わせた梅原に目撃された。

そして梅原によって森島先輩と1年のクール美少女七咲と、見た事もない謎の美女が一緒に歩いていたと3割程度尾ひれを付けた噂が流れる事となったのは、また別の話。

第五話 天使は悪魔に恋をした 後編（後書き）

第四話後編をお届けします、リムです。

更新の遅さは本当に申し訳ありません。

実は小説家になろうで長編物ばかり読んでいました。勉強のためです。……すみません、嘘です。ただの知的好奇心です。

次、頑張ります。

第六話 欲張りは可愛さのもと

「八重にい、聞いてる？」

「ん？ ああ、聞いてるよ、鏡花」

うちのマンションに遊びに来た最愛の弟にそう答える。

久しぶりに来たと思ったら四葉姉ちゃんの愚痴を聞かせてきて、なんでこうも僕は愚痴を聞かせられるのかを考えていたのだ。

これはそんなとある平和な日に起きた、ちょっとした事件のお話。

久しぶりに鏡花がこっちに来て、家に籠りっぱなしはないかなと思
い外出しようと思ったのが運の尽きだろう。

外に出て3分しないうちに絢辻さんと梨穂子と薫に遭遇した。

……いや、まだ絢辻さんや梨穂子はよかったんだが、鏡花と薫を会
わせると大変な事に……

「鏡花じゃない！　いつこつち来てたのよー」

「あ、花ちゃんだはな。久しぶり」

「こんにちは白石くん。そっちの子は弟さん？」

まさしく三者三様だな。

薫、梨穂子、絢辻さんの順に挨拶（薫は挨拶ではない）してきたが薫の姿を見た瞬間に鏡花が怯え始めた。

実は幼少期の話にさかのぼるのだが、薫や梨穂子とは小さい時はずっと一緒に遊んでいた。もちろん梅原や純一もいたが。

そして鏡花が家にいると四葉姉ちゃんにイジメ（本人は愛でているだけと主張）られるというのと僕にべったりだった事もあり一緒に遊ぶことにしたのだ。

僕の弟とその四人に紹介すると、全員が全員「妹じゃないのー！？　」
とツツコミがあった。

……うん。まあ小さいときの鏡花は本当に女の子にしか見えなかったものだった。

そんな鏡花は梅原や純一に同性にしてはちょっと態度がおかしくな
いか？というスキンシップ等があったり、妹が欲しかったらしい梨
穂子は自分の妹のように可愛いがっていた。……弟なんだけど。

一番の問題は薫だ。薫は鏡花の可愛さにやられて抱き着いたり、耳に息を吹きかけたりしていた。

今までは僕にしていた事だが、僕が年頃だったために嫌がっていたから標的を鏡花に変更したようである。

……こうして鏡花は四葉姉ちゃんと同じ事をしてくる女友達？をつくってしまったのだ。

いわずもがな鏡花は薫に苦手意識がある。

そして今、その悪夢が再び現実となったわけだ。

鏡花は僕の後ろに隠れている。

「きょーっか？」

「やめる薫。鏡花が怯えてるだろ」

「……………ぶるぶる」

「久しぶりに会ったんだもん。……………いつちょ昔みたいに遊んでもいいじゃないのよ」

「その遊びが鏡花のトラウマなんだけど」

薫と口論を続ける。鏡花を守るために……というのは建前なんだけど。

実は薫とこういった言い合いをするのは楽しい。

もともと明るいやつだからたまにこうして騒ぎ合つと僕も楽しくなってくるのだ。

薫とさんざん騒ぎ合つた後、絢辻さんを見事にほったらかしにしていた事に気づいた。梨穂子は僕と薫が口論している時に鏡花と話していたようだ。

「絢辻さん、ほったらかしにしてごめんね」

「いや、いいのよ。なんだか久しぶりの再会みたいだし」

「ごめんね。……それでなんでこれと一緒にいるの？」

後ろでこれ扱いされた薫が何か騒いでいるが無視。

「実はそこではったり」それで声をかけてもらったの」

「なるほど。で、今は何を？」

「特に用事はないわよ。本当にさっき揃ったばかりだもの」

私は散歩してただけだったし、とも。

「さうで、八重乃、鏡花。ここで会ったのも何かの運命だね。今からあんたん家行くわよ」

「はあ!？」

薫が急に。うん、ほんと急に。突拍子も脈絡もなんにもない事を言い出した。

……これはレイチエルもびっくりだぜえ……!

「桜井さんも絢辻さんも一緒に! 遠慮は無用よ!」

「まてえい!!」

勝手か!

前から分かってたけど勝手か!

「ええ……いいの?」

「私少し興味があるわ……」

……梨穂子も絢辻さんもマジですか……

「ようし！ 王様ゲームやるわよ！ もちろん私が王様で！」

「いやいや、おかしいだろ」

「いいじゃない、どうせ命令されるのはあんた達だし」

「それがおかしいんだよ！ 見ろ、鏡花が部屋の端っこで体育座りしてんじゃねーか！」

「いいじゃないそんなの。無理矢理引きずり出したら」

……もう薫とのバカ騒ぎである。

マンション
結局家に来たトリオ。

薫は僕とひたすら騒ぎ合って、梨穂子は鏡花を慰めていて、絢辻さんは部屋のインテリアとかを眺めている。

……調子に乗った薫が鏡花を抱きしめようとしていたので、引きはがした。

ちよつとここらで薫に思い知らすべきかな。

あまりにも鏡花をイジメようとしつこいならどうなるかを。

「かゝるゝ？」

「へっ？ ……ちよつと八重乃？ 冗談じゃない、怒らないで……」

「問答無用！！」

まず薫をベッドに押し倒す！

「え！？ 何してんのよ！？」

「ふっふっふっ」

そうして僕は薫を……これでもかたくすぐる！

「ふやっ！ あっひやっひやっ！」

「どうだどうだ、思い知ったか！」

「わ、わかったから……あ……も、もうやめて……」

「いや、わかってない。よって続行」

「そん……なあ……ひゃっ！」

責めに責める。

首、脇、脇腹、太ももなど。

くすぐったくなる場所をこれでもかという程くすぐっていく。

薫の顔は上気して赤くなっていて、笑いすぎのせいで上手く呼吸ができていない。

しかしたまにはこういう目に合ってもらわないと、と思い心を鬼にしてくすぐりつづける。

約2分程度くすぐりつづけ、命請いをして来たので解放する。

放した瞬間からはあー、はあー、と足りなかった酸素を取り込んでいく。

これで薫もしばらくは反省するだろうと思ってから気付いた。

……梨穂子と絢辻さんが顔を赤くしながらこちらを見ていた事に。

第六話 欲張りは可愛さのもと（後書き）

第六話お届けします。

遅い！そして短い！……すみません反省してます。

実は番外編みたいな感じで色々と書きたいのですが、もしこんなストーリーがあつたらいいな、と希望があればコメントお願いします。

出来るだけ頑張ります。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1854u/>

アマガミ～聖夜の物語～

2011年8月3日21時20分発行